

2026/2/22 UC

マルコの福音書7章24-30節

「あなたの口を大きく開けよ」

主題：信頼を選択し、大胆に本当の求めを告白する

Mark 7:24 ¶ Ἐκεῖθεν δὲ ἀναστὰς ἀπῆλθεν εἰς τὰ ὄρια Τύρου. Καὶ εἰσελθὼν εἰς οἰκίαν οὐδένα ἤθελεν γνῶναι, καὶ οὐκ ἠδυνήθη λαθεῖν·

Mark 7:25 ἀλλ' εὐθὺς ἀκούσασα γυνὴ περὶ αὐτοῦ, ἧς εἶχεν τὸ θυγάτριον αὐτῆς πνεῦμα ἀκάθαρτον, ἐλθοῦσα προσέπεσεν πρὸς τοὺς πόδας αὐτοῦ·

Mark 7:26 ἡ δὲ γυνὴ ἦν Ἑλληνίς, Συροφοινίκισσα τῷ γένει· καὶ ἠρώτα αὐτὸν ἵνα τὸ δαιμόνιον ἐκβάλῃ ἐκ τῆς θυγατρὸς αὐτῆς.

Mark 7:27 καὶ ἔλεγεν αὐτῇ· ἄφες πρῶτον χορτασθῆναι τὰ τέκνα, οὐ γάρ ἐστιν καλὸν λαβεῖν τὸν ἄρτον τῶν τέκνων καὶ τοῖς κυναρίοις βαλεῖν.

Mark 7:28 ἡ δὲ ἀπεκρίθη καὶ λέγει αὐτῷ· κύριε· καὶ τὰ κυνάρια ὑποκάτω τῆς τραπέζης ἐσθίουσιν ἀπὸ τῶν ψιχίων τῶν παιδίων.

Mark 7:29 καὶ εἶπεν αὐτῇ· διὰ τοῦτον τὸν λόγον ὑπάγε, ἐξελέλυθεν ἐκ τῆς θυγατρὸς σου τὸ δαιμόνιον.

Mark 7:30 καὶ ἀπελθοῦσα εἰς τὸν οἶκον αὐτῆς εὗρεν τὸ παιδίον βεβλημένον ἐπὶ τὴν κλίνην καὶ τὸ δαιμόνιον ἐξελελυθός.

Mark 7:24 イエスは立ち上がり、そこからツロの地方へ行かれた。家に入って、だれにも知られたくないと思っておられたが、隠れていることはできなかった。

Mark 7:25 ある女の人が、すぐにイエスのことを聞き、やって来てその足もとにひれ伏した。彼女の幼い娘は、汚れた霊につかれていた。

Mark 7:26 彼女はギリシア人で、シリア・フェニキアの生まれであったが、自分の娘から悪霊を追い出してくださるようイエスに願った。

Mark 7:27 するとイエスは言われた。「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」

Mark 7:28 彼女は答えた。「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」

Mark 7:29 そこでイエスは言われた。「そこまで言うのなら、家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」

Mark 7:30 彼女が家に帰ると、その子は床の上に伏していたが、悪霊はすでに出ていた。

頑なな子どもたち

Mark 7:24 イエスは立ち上がり、そこからツロの地方へ行かれた。家に入って、だれにも知られたくないと思っておられたが、隠れていることはできなかった。

さらっと、立ち上がってツロの地方に行かれた、と記されていますが、歩いて2-3日かかるかなりの旅です。

ツロはギリシャ文化の地域であり、完全な外国でした。でも、イエス様はそこに行く必要がありました。

イエス様^はイスラエルの北部地域であまりにも有名になりすぎましたし、エルサレムの指導者たちからも目をつけられ始めました。これからもイスラエルの町々に福音を伝え、過越の祭りのタイミングで十字架にかかるために、どこかでほとぼりをさます必要があったと思います。

イスラエルの民、特に律法学者やパリサイ人たちの頑なさは、すさまじいものでした。語っても、語っても彼らはさらに反抗的になり、殺意を燃やしました。

そんなわけで、イエス様は一時的に外国に高跳びをしているわけです。ですから、この旅の目的は、噂を静めるために隠れること、だったのです。

しかし、イエス様は結局隠れることは出来ませんでした。イエス様の噂は外国のここまで届いていました。だからです。

Mark 7:25 ある女の人が、すぐにイエスのことを聞き、やって来てその足もとにひれ伏した。彼女の幼い娘は、汚れた霊につかれていた。

Mark 7:26 彼女はギリシア人で、シリア・フェニキアの生まれであったが、自分の娘から悪霊を追い出してくださいというイエスに願った。

Mark 7:27 するとイエスは言われた。「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」

彼女は必死です。だって幼い娘が悪霊に取り憑かれていたからです。暴れ続けるのでしょうか、泣き喚くのでしょうか、そんな娘を救たくて、彼女はイエス様の前に身を投げ出して助けを願います。

イエス様は、今は無理なんだ、と事情を話します。

Mark 7:27 するとイエスは言われた。「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」

「まず」と言っています。今は無理だ、ということです。イスラエルの子どもたちを満腹にさせなくては、というのです。ここに見えるのは神様の「誠実さ」です。遙か昔、神様はアブラハムという人と約束を交わして、彼の子孫であるイスラエル民族の祝福を約束されました。しかし、この民はその後ことごとく神様を裏切ります。

なのに、神様は彼らを捨てないのです。約束したからです。なんと、馬鹿正直な、、、とも思うかもしれませんが、でも、神様ってそういう方なのです。一度約束したら、ぜつたいに破棄われしないのです。だから、私たちもこの方には全幅の信頼ができるわけです。

イエス様のおことばには、この母親に苦しい事情をわかって欲しい、という思いも込められているように思います。

「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません」^{つゆとけ}

ところがその肝心のイスラエルの民は、口をあけてパンを食べようとしません。頑なにイエス様を疑い、妬み、憎んでいます。^{妬み} そんな風にも聞こえて、イエス様の苦しみが垣間見えるように思うのです。^{今日の米はこいへずおのこはなれ} ^{もどかし}

マルコは、彼女が異邦人であることをかなり強調しています。

Mark 7:26 彼女はギリシア人で、シリア・フェニキアの生まれであったが、自分の娘から悪霊を追い出してくださいというイエスに願った。

ギリシア人というのは、文化的に外国人であるという意味であり、シリア・フェニキア生まれというのは、血統的にも外国人である、ということです。

イエス様はイスラエル人を「子どもたち」と呼ぶ一方で、彼女のことを子犬と表現しています。正確には子犬たちと複数形なので、彼女と苦しんでいる幼い娘のことも見ているのかもしれませんが。

犬という表現は侮辱する時にも使うことばですが、ここで使われているギリシャ語は別のことばで、家で飼われている子犬であり、懸命に主人に訴えている様子であらわれていると思います。

あなたたちの必要はわかっている。でも、順番があるんだ。あのなかなか満腹しない子らを、まず満たさなくてはいけないんだ。今ここで、また噂を大きくするようなことになったら、本末転倒なんだ。ということだと思うのです。

あなたの口を大きく開けよ

ところが、フェニキアの女性は、即座にみごとな切り返しをしました。

Mark 7:28 彼女は答えた。「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」

子犬で結構です。イスラエル人への誠実を貫かれるのも結構です。でも、あなたの溢れる恵みのおこぼれなら、いただけるでしょう？子犬たちだって、落ちるパンのかけらはもらえるのですから、と。

彼女が5000人のパンの奇跡のことを知っていたのかどうか、わかりません。しかし、私たちは知っています。多くの人にパンを与えたとき、あまったパンくずは12のかごに満ちました。

神様の恵みの特徴は「満ちあふれる」ところにあります。~~恵みです。~~
神様の愛が「満ちあふれる」愛だからです。~~です。~~

彼女はイエス様を通してあらわれる、神様の力の計り知れなさを信じています。そして、神様の愛はユダヤ人だけではなく、全世界の人々をあわれむ、大きなものであることを信じて疑っていません。

こんなみことばがあります。

Psa. 81:10 わたしはあなたの神主である。

わたしがあなたをエジプトの地から連れ上った。

あなたの口を大きく開けよ。

わたしがそれを満たそう。

Psa. 81:11 しかし、わたしの民はわたしの声を聞かず

イスラエルはわたしに服従しなかった。

あなたの口を大きく開けよ。神様に大胆に期待して、最良の恵みを求めよ、と言われていました。なんと幸いな招きでしょう。

しかし、イスラエルの民はそれをしなかったのです。

口を開ければよかったのに。信頼すればよかったのに。かえって自分の力や、神様以外のむなししいものによりたのみ、心をかたくなにしました。

しかし、異邦人の女性は、まさにこれをしたのです。子犬が無邪気に、一心にパンを求めるように、口を大きく開けて、信頼しました。

私がそれを満たそう

すると何が起こったでしょう。

Mark 7:28 彼女は答えた。「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」

Mark 7:29 そこでイエスは言われた。「そこまで言うのなら、家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」

Mark 7:30 彼女が家に帰ると、その子は床の上に伏していたが、悪霊はすでに出ていた。

イエス様は、彼女の開かれた心を恵みで満たされたのです。願いを叶え、娘を救われました。

イエス様はこう言われていますね。「そこまで言うのなら、家に帰りなさい。」イエス様は、驚き、また喜ばれています。

そこまで言うのなら、という表現の直訳は、このことばのゆえに、です。ことばというのは、心の中の思いが、形となって現れるものです。彼女は、幼い娘が苦しんでいるという抜き差しならない状況の中で、イエス様を信じるかどうか決めなければなりませんでした。

愛するみなさま、神様に信頼するかどうかを問われる時があります。それは試練とも言えるでしょう。でも、それは恵みの時でもあります。決断して、「全振り」せざるを得ないからです。

神様の無限の愛に信頼して、自分の身を投げ込むのです。

そうやって心が決まったからこそ、彼女の口からこんなことばが出てきたのです。

Mark 7:28 彼女は答えた。「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」

神様という方は、こんなふうにな身を投げ出す人に、答えずにおくことができない方です。信頼には最善の恵みで応えざるを得ない方なのです。

「あなたの口を大きく開けよ。わたしがそれを満たそう。」

大きく口を開けることです。愛なる主は必ず満たしてくださいませ。

聞かれない祈り

愛する皆様。あなたが求めているものはなんですか。神様にしか与えることができないもの。あなたの心が本当に願っているものは何ですか。

もしもそれがあんなら、大きな口を開けて、大胆に求めることです。恐れずに、ことばにして、本当の気持ち、一番の期待を伝えましょう。

私は高校生の時に、そうやって祈った記憶があります。私が一番欲しかったのも。心の一番の願い。それは愛でした。本当の愛でした。それがあれば、生きていける。それがないと、生きていけない。

でも、それを言葉にして祈ることに恐れを感じました。

もしもこんなに信じて祈って、答えられなかったら、と。その時、私はクリスチャンではいられなくなる、と。本当の愛が得られないという悲しみだけでなく、大好きな教会もまた、失うことになる、と。だって、神様は答えてくださらない、実在しない存在なのですから。

でも、勇気を出して祈りました。聞かれなかったときのことなんか、考えずに、こういう言い方は慎重に使うべきでしょうが、命懸けで祈りました。

そして、約40年前のあの祈りをしたことを、うれしく思います。

あの祈りが、いつ、どのように聞かれたのかは説明できませんが、あれから二度と神様の愛がわからない、ということはありません。私は愛の中において、私の中に愛があります。

愛するみなさま。信頼を持って祈る祈りを、神様は必ず聞かれます。理由があります。

Matt. 27:46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

イエス様の十字架での叫びです。

神の子であるイエス様が、懸命に助けを呼ぶ祈りをされています。でも、助けは来ません。

これは、私の身代わりの十字架の一部です。

罪人の祈りは届きません。その「聞かれない祈り」の悲しさを、イエス様が背負ってくださいました。その身代わりの愛が意味することは、十字架の救いを受け取った人の祈りは、必ず聞かれる、ということです。

愛する皆様。あなたの口を大きく開けて、あなたの本当の求めを、大胆に伝えましょう。イエス・キリストの名によって求めましょう。

神様はあなたの口を満たされます。信頼することを選択して、求めを告白する人に、神様が答えない、ということはありません。

(再読)

祈り